〔特別展／東洋美術1000年の軌跡によせて〕

松永コレクションの高麗茶碗

松永コレクションは耳庵と号した故松永安左エ門氏の茶器を中心とする個人コレクションで、249件350点の作品で成りたっています。小田原市にあった財団法人松永記念館が解散するに際し、その大部分を昭和55年３月に福岡市美術館に寄贈したものです。同コレクションには重要文化財19件26点、重要美術品10件14点が含まれているなど、東洋の古美術の名品が多数みられます。

今回の特別展では松永コレクションから重要文化財16件、重要美術品７件を含む53点の作品を出陳いたしますが、それらの主なものは茶掛に用いられた日本・中国の絵画や書蹟、そして茶碗・茶入・花入・茶釜などの茶道具です。ここではそれらの中から名碗として知られる高麗茶碗５点だけを取上げて、紹介させていただきます。

高麗茶碗とはいうまでもなく、隣国・韓国で主に朝鮮時代、15世紀から17～18世紀にかけて各地で焼造されたものです。高麗茶碗と呼ばれてはいますが、高麗時代のものは少なく、そのほとんどは朝鮮(李朝)時代のものです。これは我国では韓国を高麗時代以来、高麗と称していましたので、中国からの請来品を唐物と呼んでいたのと同様に、韓国からの請来品を高麗物と呼んだことによるものと思われます。韓国からもたらされ、茶人に大いに賞翫された茶碗をいつしか高麗茶碗と総称するようになったのです。

高麗茶碗は茶会記などの資料から推測すると、それが我国で用いられるようになったのは侘の茶風が時流となりつつあった天文年間(1532～55)頃からのようですが、実に多様な様式が見られます。長い年月をかけて茶人達が作風などからそれらを分類して命名した名称を列記してみますと、「狂言袴」「雲鶴」「三島」「刷毛目」「粉引」「大井戸」「小井戸」「青井戸」「雨漏」「熊川」「蕎麦」「柿の蔕」「魚屋」「井戸脇」「五器」「御所丸」「玉子手」「彫三島」「釜海」「割高台」「伊羅保」「御本」などなどです。

松永コレクションの高麗茶碗に話しを戻しましょう。五碗中、まず最初にご紹介するのが「雨漏茶碗」(カット①)です。本碗が平戸松浦家に所蔵されていた時、松平不昧が箱書をしたものと考えられています。内箱蓋表には「雨漏」、蓋裏には「くちぬまのいほりの軒のひまとめて　もりくる雨のあしの八重ふき」と、いずれも金粉字形で記されています。不昧はこの茶碗を所持したいと切望しますが、ついに松浦家が手離さなかったようです。雨漏はその名のように白い地膚に雨漏によって出来たような朽葉色の滲が生じたものですが、その滲は茶碗として用いられている間に出来たものです。16世紀に請来された茶碗がその約100年後の元禄年間(1688～1704)頃には滲が生じて、雨漏と称されるようになったようです。腰にふくらみをもった大ぶりの茶碗で、侘びつつも風格を感じさせます。雨漏はかなり濃く広い範囲に及んでいますが、一方の火割れを中心にしていることでそこから次第にこの景色を生んだようです。粗めの貫入も風情を添えています。高台は竹節をなし、高台内は力強く削られて縮緬じわが目立っています。

「雨漏堅手茶碗　銘天野屋」(カット②)は雲州松平家伝来で、のびやかな椀形をしています。口縁はわずかに端反りで、胴の中ほどから口縁に向けて細かい轆轤目がめぐっています。高台は竹節をなし、高台際には縮緬じわと梅華皮が見られます。雨漏の滲は淡く濃く随所に現われ、外側の一部に青味をおびた所があります。

「粉引茶碗　銘十石」(カット③)は数ある耳庵翁遺愛の茶碗の中でも、翁の最も愛玩された品と言われています。胴に数条の轆轤目がくっきりと立ち、次第に端反りの口縁へと至っています。ゆがみのある器体と変化に富んだ釉調がこの茶碗の魅力です。黒土に厚く施された白化粧は処々に釉が流れ、あるいは溜まって濃淡の景色となり、器全体に生じた気胞とあいまって尽きない味わいを与えています。

「青井戸茶碗　銘瀬尾」(カット④)は比較的小振りで、外箱蓋表に「青井戸小服茶碗」と三井長福が書しています。全体に作行きがおとなしく、渋い趣の茶碗と言えます。胴にはふっくらとしたまる味があり、外側に五段の轆轤目がめぐっています。見込は杉形に深く、中央に小さな茶溜りがつけられて、目跡が四つ、景をなしています。総体に釉がけが厚く、外側は灰青色を呈して、高台脇には荒く細かく梅華皮が現われています。ところで、青井戸とは言うまでもなく、還元気味に焼成されて大井戸や小井戸よりも青い趣が強いので名付けられたのでしょうが、しかし青井戸と呼ばれているものの中にはさして青味がちではなく、渋い枇杷色に焼き上っているものもあります。

「柿の蔕茶碗　銘白雨」(カット⑤)は松平不昧が所持していたもので、その蓋表に不昧が「白雨」の銘を朱漆で書いています。松平家より原三渓の許に移り、第２次大戦後松永耳庵が原家から譲り受けました。やや大振りで、口端には高く低くうねりがあり、見込の深い茶碗です。高台は高く削り出され、内部はまるく深く削り込まれて、中央に兜巾がくっきり立っています。釉はむらがあり、青緑色を呈して、全体的に力強い作行きですが、しかし柿の蔕ならではの寂びた趣をそなえ、茶味の深い茶碗です。

数奇者を思わず唸らせるであろうこれらの名碗をこの機会にぜひ御高覧下さい。(林屋晴三編著、中央公論社刊『高麗茶碗』〈全５巻〉を参考に致しました。　吉田宏志)

①雨漏茶碗

②雨漏堅手茶碗　銘天野屋

③粉引茶碗　銘十石

④青井戸茶碗　銘瀬尾

⑤柿の蔕茶碗　銘白雨

季刊 美のたより No.120
平成９年８月21日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.